

幼 稚 園

平成 29 年度

教育研究員研究報告書

幼 稚 園

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
1	幼児の実態と課題	1
2	研究主題の設定	1
II	研究の視点	2
III	研究仮説	2
IV	研究の方法	2
V	研究の内容	2
1	研究対象とする遊びの設定	2
2	「自立心」につながる幼児の経験内容	3
3	自信をもって行動するようになるために必要な経験の過程	8
4	自信をもって行動するようになるために必要な経験	9
5	検証保育（抜粋）	12
6	検証結果	22
VI	研究のまとめ	22
1	自信をもって行動するようになるために必要な経験の 過程の明確化について	22
2	自信をもって行動する幼児を育てるための援助の在り方 について	23
VII	今後の課題	24

研究主題

自信をもって行動する幼児を育てる ～「自立心」に着目した援助を通して～

I 研究主題設定の理由

1 幼児の実態と課題

幼稚園教育は、幼児の自発的な活動としての遊びを通して、総合的な指導を行うことが基本であることから、教師は、幼児が興味や関心に基づいて自発的に環境に関わって遊びや生活を展開することができるよう援助を行っている。しかし、日々の保育においては、友達のしている遊びや教師がねらいに基づいて設定する遊びには安心して参加する一方で、「自分でやりたいことを決め、身近な環境に主体的に関わって遊び出す姿が少ない」、「自分で遊び始めても、少し難しいことがあるとやめてしまう」、「自分で行動する前に、その都度、教師に確認をしないと不安を感じる」などの幼児の姿が見られる。

幼稚園教育要領（文部科学省 平成 29 年 3 月）の「人間関係」の領域には、「(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。」というねらいと、「(2) 自分で考え、自分で行動する。」という内容が示されている。幼児に「生活の様々な場面で自分なりに考えて自分の力でやってみようとする態度を育てることは、生きる力を身に付け、自らの生活を確立していく上で大切である」¹ため、このような幼児の実態は課題であると考えた。

2 研究主題の設定

平成 29 年 3 月に告示された幼稚園教育要領において、幼稚園教育において育みたい資質・能力が「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」に整理され、これらの資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿を表したものととして、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が以下のように示された²。

- | | | | |
|--------------------------|---------------|------------------|------------------|
| (1) 健康な心と体 | (2) 自立心 | (3) 協同性 | (4) 道徳性・規範意識の芽生え |
| (5) 社会生活との関わり | (6) 思考力の芽生え | (7) 自然との関わり・生命尊重 | |
| (8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 | (9) 言葉による伝え合い | | |
| (10) 豊かな感性と表現 | | | |

「(2)自立心」は、「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。」³姿である。この姿は、幼児の実態と課題に対して、教師が目指す幼児像そのものである。

また、「自立」という表現には、基本的な生活習慣の形成や身辺自立など、いわゆる生活面におけるイメージが強かったが、「幼児が、いろいろな遊びを楽しみながら物事を心ゆくまで楽しみ、その中で物事をやり遂げようとする気持ちをもつことは幼児の自立心を育む上で大切なことである」⁴ため、幼児の自発的な活動としての遊びにおける「自立心」の育成につい

¹ 幼稚園教育要領中央説明会資料（文部科学省 平成 29 年 7 月）p. 169

² 幼稚園教育要領（文部科学省 平成 29 年 3 月）p. 3-5

³ 同上 p. 4

⁴ 幼稚園教育要領中央説明会資料（文部科学省 平成 29 年 7 月）p. 171

て理解を深めることが必要であると考えた。

これらの理由から、幼児の課題解決へ向けた教師の適切な援助の在り方を探るために、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「(2)自立心」(以下、「自立心」と表記する。)に着目することが有効なのではないかと考え、研究主題を「自信をもって行動する幼児を育てる～「自立心」に着目した援助を通して～」と設定した。

II 研究の視点

- ・ 「自立心」の視点から、幼児が自信をもって行動するようになるために必要な経験の過程を明らかにする。
- ・ 幼児が自信をもって行動するようになるために必要な経験を積み重ねるために、「自立心」に着目した意図的・計画的な援助を行う。

III 研究仮説

「自立心」に着目し、幼児が自信をもって行動するようになるために必要な経験の過程を明らかにし、それらの経験を確実に積み重ねられるよう、教師が意図的・計画的な援助を行うことができると、幼児期の終わりまでに自信をもって行動する幼児が育つだろう。

IV 研究の方法

- 文献研究及び事例研究
 - ・ 幼稚園教育要領（文部科学省 平成 29 年 3 月）の解釈
 - ・ 「自立心」につながる幼児の経験内容及び教師の援助の分析・考察
 - ・ 幼児が自信をもって行動するようになるために必要な経験の過程の明確化
 - ・ 幼児が必要な経験を積み重ねるための援助の明確化
- 検証保育
 - ・ 幼児が自信をもって行動するようになるために必要な経験を踏まえ、「自立心」に着目した意図的・計画的な援助の実践

V 研究の内容

1 研究対象とする遊びの設定

幼稚園教育要領中央説明会資料（文部科学省 平成 29 年 7 月）の「自立心」の説明では、「自立心」につながる姿が見られる遊びとして、「こま回し」が例示されており、「諦めずにやり遂げる体験を通して達成感を味わう」遊びは、縄遊びや竹馬などの、課題に向かって繰り返し挑戦する遊びがイメージされやすいと考える。しかし、幼稚園でどの学年においても日常的に見られるのは、なりきったり見立てたりする遊び、いわゆる「ごっこ遊び」である。

「自立心」の姿は、「5 歳児の後半に急に現れるものではなく、いろいろな遊びから自分がやりたいことを自分で選んで行動し、少し難しいと思うこともやってできた満足感を味わうなどの体験の積み重ねの中で育まれることに留意する必要がある」⁵と示されていることから、

⁵ 幼稚園教育要領中央説明会資料（文部科学省 平成 29 年 7 月）p. 54

教師は、いろいろな遊びにおいて「自立心」へのつながりを意識することが必要だと考えた。

そこで、本研究においては、課題に向かって繰り返し挑戦する遊びではなく、なりきったり見立てたりする遊びに焦点をしばって、研究を進めることとした。なお、本研究においては、なりきったり見立てたりする遊びを総じて「ごっこ遊び」と呼ぶこととした。

2 「自立心」につながる幼児の経験内容

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、「5領域の内容等を踏まえ、特に5歳児の後半にねらいを達成するために、教員が指導し幼児が身に付けていくことが望まれるものを抽出し、具体的な姿として整理したもの」⁶であり、「3歳児、4歳児それぞれの時期にふさわしい指導の積み重ねが、この『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』につながっていくことに留意する必要がある」⁷ため、発達段階に応じた適切な指導の積み重ねが大切である。

そこで、まず、「自立心」につながる幼児の経験内容が、幼児が自信をもって行動するようになるまでの経験の過程になると考え、文献研究及び事例研究を行うこととした。

(1) 文献研究

本研究において着目した「自立心」の告示文を読み解き、示された内容を分析・検討した結果、告示文には幼児の姿が複数示されていることに気付いた。そこで、「自立心」の告示文を次のように分けることにより、実際の幼児の姿をイメージし、具体的な経験を捉えやすくなるのではないかと考えた。(下線、太字、数字等は本研究による。)

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、

- ① しなければならないことを自覚し、
- ② 自分で行うために考えたり、
- ③ 工夫したりしながら、
- ④ 諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、

⇒ **自信をもって行動するようになる。**

このことにより、前半の「身近な～中で」は、幼児が①～④の姿を経験するための前提であることに気付いた。すなわち、幼児が幼稚園における様々な活動を楽しんでいる経験がなければ、その後の経験につながらないと捉えることができる。また、この姿は「幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、幼稚園教育に育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿であり、特に5歳児後半に見られるようになる姿である」⁸ため、4歳児や5歳児前半においても、「自立心」の芽生えとなる経験が見られるのではないかと考えた。

(2) 事例研究

文献研究を基に、「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で」という文言を、

⁶ 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（文部科学省 平成28年12月21日）p.76

⁷ 同上

⁸ 幼稚園教育要領中央説明会資料（文部科学省 平成29年7月）p.49

「幼児が主体的にごっこ遊びを楽しんでいる中で」と具体的に捉え、4歳児、5歳児の各学年の事例研究を行った。「自立心」の①～④の姿を視点として分析・考察をすることにより、「自立心」につながる経験内容や、その積み重ねを意識した教師の援助の在り方を明らかにすることができるのではないかと考えた。

事例研究では、「①しなければならないことを自覚」する姿を、「自分でやりたいことを見付ける」、「自ら遊びに必要なことに気付く」などの姿として、また「④諦めずにやり遂げることで達成感を味わう」姿を「楽しさを感じる」、「満足感や充実感を味わう」姿として捉えることにした。さらに、援助をキーワード化することで、行っている援助の明確化を図った。

ア 事例研究例①「電車ごっこ」 2年保育4歳児6月

(ア) A児の実態

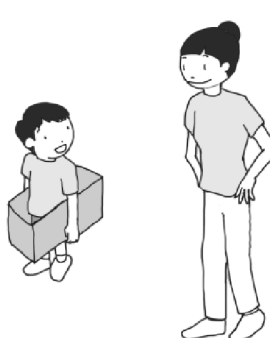
- ・ 電車への興味や関心が強く、5歳児の電車ごっこの仲間に入って遊ぶことがある。
- ・ 友達との触れ合いを楽しみ、周囲の様々な遊びに興味をもって関わろうとするため、遊び込む前に、次の遊びを始めることが多い。

(イ) A児のねらい

- ・ 自分のやりたい遊びのイメージを実現させ、自分なりに遊ぶことを楽しむ。

(ウ) A児の姿と教師の援助の分析

~~~~~ : 教師の援助、\_\_\_\_\_ : 「自立心」の①～④が見られる幼児の姿、□ : キーワード化した援助

| 教師による『幼児の心情の読み取り』と「自立心」の①～④の視点による分析                                                                                                                                                                                                                                                | 幼児及び教師の姿                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | 「自立心」に関わる援助                                                                                                                                                                                                                |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>『もっと本物の電車のようにしたい。そのためには、タイヤが必要だ。』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遊びに必要な物事を自覚する (①)</li> </ul> <p>『本物の電車にはたくさんタイヤがついているから、もっとタイヤが必要だ。ガムテープの芯を探そう。』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分のイメージを実現させるために必要な物に気付く (①)</li> <li>・ 自分で行うために考える (②)</li> </ul> | <p>A児が、板段ボール製の衝立を持ち、「電車だよ。」と走る。</p> <p>教師は、衝立では遊びにくいと考え、「これも電車みたいに見えるかな。」と枠型の段ボールを提示する。A児は、嬉しそうな表情を見せる。</p> <p>A児は枠型の段ボールの側面を指し示し、「ここにタイヤが必要だよ。」と言う。(①)</p> <p>教師は「どうするといいいかな。」と言って、A児と一緒に考える様子を見せる。</p> <p>A児と教師とのやり取りを聞いていた友達が、素材コーナーからガムテープの芯をいくつか持って来て、A児に渡す。A児はそれらを受け取り、セロハンテープで枠型の段ボールの側面に付けるが、箱の側面の半分くらいまで付けると、ガムテープの芯がなくなる。</p> <p>A児は「(側面)全部に貼らないといけないんだよ。」と言って、さらにガムテープの芯を探しに行き、枠型の段ボールの側面に貼り付ける。(①②)</p> | <p>A児の「電車」のイメージを実現させ、十分にその遊びを通して、そのイメージを楽しめるよう、遊びに使いやすい素材を提示する。</p> <p>示す</p> <p>具体的な方法を言わないことにより、幼児が自分で考えられるようにする。</p> <p>気付かせる</p>  |

|                                                                                                                                                    |                                                                                                                        |                                                                                                           |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>『青い電車にしたい。』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ タイヤを付けることができ満足する (④)</li> <li>・ やりたいことを見付ける (①)</li> </ul>                             | <p>セロハンテープは接着力が弱く、A児が貼り付けたガムテープの芯が取れやすくなっているため、<u>教師は必要な箇所をガムテープで補強する。</u></p>                                         | <p>A児が自分で考えたことを実現させ遊ぶことができるよう、自分の力でたくさんのタイヤを付けたことを認めつつ、今後、A児がタイヤを気にせずに電車ごっこを楽しめるようにする。</p> <p>認める 手伝う</p> |
| <p>『電車に乗るためには、チケットが必要だ。』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遊びに必要な物を自覚する (①)</li> <li>・ 自分で考えて取り組む (②)</li> </ul>                        | <p>A児はガムテープの芯を貼り終わると、「<u>ここ(側面)を青にしないとイケないんだよ。</u>」と言う。(④①)</p> <p>&lt;2日目&gt;<br/>教師は青色画用紙とのりをA児が気づきやすい場所に準備する。</p>   | <p>A児が自分で遊び出せる環境を構成する。</p> <p>示す</p>                                                                      |
| <p>『自分が考えていたとおりの電車になった。』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分のイメージどおりの電車に満足する (④)</li> </ul>                                            | <p>A児は、電車のチケットを作るために、<u>色画用紙を持って来て、小さくちぎる。</u>(①②)</p> <p>教師はA児の電車に色を付ける。</p>                                          | <p>A児がチケット作りを始めたため、その姿を認めるとともに、A児がイメージしていた電車を実現させると、より遊びの充実につながるのではないかと考え、教師が電車の色を付ける。</p> <p>認める 手伝う</p> |
| <p>『電車もできたし、チケットもできたから、お客を乗せたい。』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分のやりたいことを見付ける (①)</li> <li>・ 自分で考えて取り組む (②)</li> </ul>              | <p>A児は自分の作った電車が青い電車になったのを見て、<u>とても喜び、電車に乗って動くことを楽しむ。</u>④</p> <p>A児は、友達に声を掛け、<u>電車の後ろに友達を乗せて走る。</u>(①②)</p>            | <p>幼児の遊びのイメージを広げるため、環境を構成する。</p> <p>示す</p>                                                                |
| <p>『昨日楽しかったので、今日も電車ごっこをやりたい。』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分のやりたいことをするために必要なことを自覚する (①)</li> <li>・ 自分の電車に満足し、愛着をもつ (④)</li> </ul> | <p>教師は、<u>巧技台のフタを廊下に置き、2か所の駅を作る。</u></p> <p>&lt;3日目&gt;<br/>A児は電車や駅を自分で用意し、<u>友達に声を掛け、年長のお店へ行く友達を電車に乗せて遊ぶ。</u>(①④)</p> |                      |

(エ) 考察

- ・ 教師がA児の先行経験や実態を把握し、興味・関心に沿って、遊びに必要な環境を提示(示す)することで、A児は「①自分のやりたいことを次々に見付け」、A児なりに考えて、イメージを実現させながら遊んでいる。
- ・ A児の実態から、まずはイメージを実現させ、「④楽しさや満足感を味わ」えるよう、技能面の援助をしたり(手伝う)、遊びやすい教材を提示したり(示す)する援助を行った。その援助により、A児は当初のイメージを生かし、「①やりたいことを見付け」、「②自分で行うために考え」、「④楽しさや満足感を味わう」ことを繰り返すことができた。

イ 事例研究例②「焼き鳥のお店ごっこ」 2年保育5歳児7月

(ア) B児の実態

- ・ 自分で明確なめあてをもって遊び始めることは少ないが、友達の遊びから刺激を受け、参考にし、友達に自分の考えを言葉や動きで伝えながら遊ぶことを楽しむ。

(イ) B児のねらい

- ・ 自分なりのめあてをもち、考えたり工夫したりしながら友達と一緒に遊びを進める楽しさや面白さを味わう。

(ウ) B児の姿と教師の援助の分析

~~~~~: 教師の援助、\_\_\_\_\_ : 「自立心」の①～④が見られる幼児の姿、     : キーワード化した援助

| 教師による『幼児の心情の読み取り』と「自立心」の①～④の視点による分析 | 幼児及び教師の姿 | 「自立心」に関わる援助 |
|--|--|---|
| <p>『焼く場所を作ろう。』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 必要な物を自覚する (①) ・ 必要な物を考えて準備する (②) | <p>教師は前日の様子から、<u>焼き鳥をイメージできる素材(丸スチレン、竹ひご等)を準備する。</u></p> <p>→ B児は友達に誘われ、<u>焼き鳥のお店ごっこ</u>の準備を始める。(①②)</p> | <p>遊びや経験の幅を広げ、新たなめあてをもてるように、材料を提示する。</p> <p style="text-align: right;">示す</p> |
| <p>『友達がしているように、ほくもやってみよう。』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達に刺激を受け、やりたいことを見付け、取り組む (①②) | <p>→ B児は、<u>友達が作った焼き鳥をトレイに置いていたが、次第に、焼き鳥に見立てたスチレンに自分で色を塗り始める。</u> (①②)</p> |  |
| <p>『焼き鳥にはネギがあるから、作ってみよう。』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の経験と照らし合わせて考える (②) ・ これまでの経験を生かし、工夫する (③) | <p>B児は「<u>そうだ。ネギも作りたいから、緑の絵の具が必要だ。</u>」と言い、<u>緑の絵の具を使ってネギを作り始める。</u> (②③)</p> <p>教師は「<u>いいことを考えたね。</u>」とB児に言う。</p> | <p>← B児なりのアイデアを認める。</p> <p style="text-align: right;">認める</p> |
| <p>『本物の焼き鳥みたいに、焦げを付けよう。』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ やりたいことを見付ける (①) ・ 考えたり、工夫したりする (②③) | <p>→ B児は「<u>焼き鳥って焦げるんだよね。先生、黒の絵の具を出して。</u>」と言う。(①②③)</p> <p>教師は<u>黒の絵の具を渡す。</u></p> | <p>← B児の要求に応じる。</p> <p style="text-align: right;">手伝う</p> |
| <p>『ネギには筋があるな。』
『竹ひごが使えるかな。』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 方法を考える (②) ・ 経験を生かし、工夫して取り組む (③) | <p>B児は茶色く塗った焼き鳥に<u>黒の絵の具で焦げを付けた</u>り、<u>ネギに竹ひごで、筋を付けた</u>りする。(②③)</p> <p>教師は「<u>B君、面白いことを思い付いたね。本物みたいに見えるね。</u>」と言う。</p> |  |
| <p>『網に絵の具が付いてしまう。どうすればいいかな。』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 考える (②) | <p>→ B児は焼き鳥を網に載せて焼こうとするが、<u>絵の具が乾いていないことに気付き、「これでは、網に色が付くな。」</u>と言ひ、しばらく考える。(②)</p> | <p>← B児が工夫した点を認める。</p> <p style="text-align: right;">認める</p> |
| <p>『紙を使うといいかな。』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 思うようにいかないことがあっても、工夫して、解決しようとする (③) | <p>→ 「<u>そうだ、紙を(網の上に)載せればいいんだ。</u>」とつぶやき、<u>紙を持ってくる。</u> ③</p> <p>教師はB児が自分で解決しようとする姿を見守る。</p> | <p>← 思うようにいかない事柄に対し、B児自身が考えたり、工夫したりして、解決しようとする姿を待つ。</p> <p style="text-align: right;">気付かせる 見守る</p> |
| <p>『楽しかった。明日もやりたいな。』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 満足感を味わって、明日への期待をもつ (④) | <p>→ 片付けの時間になると、B児は「<u>明日も焼き鳥のお店ごっこをやるんだ。</u>」と言って、<u>片付け始める。</u> (④)</p> | |

(エ) 考察

- ・ B児は友達と共に遊び始めるが、その中で、これまでの経験を生かしながら主体的に「①やりたいことを見付け」、「②自分で考えたり」、「③工夫したり」して遊んでいる。
- ・ 教師はB児に対して、要求に応える（手伝う）という直接的な援助を行った以外は、必要な物を環境として用意する（示す）、見守る、B児の気付きを認める、などの間接的な援助を行い、B児が自分で考えて遊びを進められるようにしている。
- ・ B児は「②自分で考えたり」、「③工夫したり」しながら集中して遊び、イメージを実現させたことにより、満足感を味わい、翌日のへの意欲をもつことにつながっている。

ウ 事例研究から分かったこと

(ア) 4歳児

- ・ 教師は、幼児の先行経験や実態を把握し、その興味・関心に応じた素材や環境を示したり、幼児が「①自分のやりたいことを見付け」、「②自分の力で考えたり行ったり」する姿を認めたりする援助を行い、イメージを実現させて遊ぶ楽しさを十分に感じさせる。
- ・ 幼児が「自分のイメージを実現させ、自分の力で遊びを進めるから楽しい。」と実感し、満足感を味わえるよう、教師は遊びをコーディネートする役割を担う必要がある。
- ・ 「③工夫する」姿はあまり見られないが、この時期の幼児は自分なりのイメージを実現させるために、自分から周りの環境に関わり、自分なりに考えたことを実現させる楽しさや満足感を十分に味わうことが大切であり、その積み重ねが、「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ」姿につながると考える。

(イ) 5歳児

- ・ 教師は、必要な環境の準備、幼児の気付きを促すような言葉掛けやモデルとなる動きの提示（示す）、選択肢の幅を広げる（示す）、見守るなど、間接的な援助をすることで、幼児自身で「①考えたり」、「②工夫したり」して遊びを進められるようにしている。その際、一緒に遊んでいる友達の姿からも、多くの影響を受けている。
- ・ 5歳児のこの時期は、「①やりたいことを見付け」た後、思うようにいかないときにも、自分なりに「②考えて」発想を広げたり、「③工夫したり」して、自分なりに解決に向かおうとする姿が多く見られた。
- ・ 「④諦めずにやり遂げて達成感を味わう」姿はまだ見られないが、集中して遊び、十分に満足感や充実感を味わっている姿は見られ、その積み重ねが④の姿につながると考える。

(ウ) 「自立心」につながる幼児の経験内容

各学年の様々な事例の分析・考察を重ね、「自立心」につながる幼児の経験内容を、次のように整理した。

| | |
|-----|---|
| 4歳児 | <ul style="list-style-type: none">・ やりたいことを自分で見付ける。・ 自分から環境に関わる。・ イメージの実現のため、自分で考える。・ イメージが実現したときの楽しさや満足感を味わう。 |
| 5歳児 | <ul style="list-style-type: none">・ 自分でイメージを実現させ、遊びを進める楽しさや満足感を味わう。・ イメージの実現のため、自分で考えたり工夫したりする。・ 思うようにいかないときに、自分で解決しようとする。・ 諦めずにやり遂げようとする。 |

3 自信をもって行動するようになるために必要な経験の過程

(1) 文献研究

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は幼稚園教育要領の「第2章に示すねらい及び内容に基づく活動を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園終了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するもの」⁹である。そこで、事例研究で整理した『自立心』につながる幼児の経験内容」を基に、幼児が自信をもって行動するようになるために必要な経験の過程を明らかにする上で、5領域との関連を確認することが必要だと考えた。

幼稚園教育要領（平成29年3月）及び幼稚園教育要領中央説明会資料（平成29年7月）から、5領域の中でも特に「自立心」と関連が深い¹⁰領域である「人間関係」の中の、「内容(2) 自分で考え、自分で行動する」が、本研究と最も関連していると捉えた。そこで、幼稚園教育要領中央説明会資料の「内容(2) 自分で考え、自分で行動する」の説明にある、次の記述¹¹（下線は本研究による。）の下線部と照らし合わせ、表1のように整理した。

自分なりに考えて自分の力でやってみようとする態度を育てるためには、まず自分がやりたいことをもち、自分から興味や関心をもって環境に関わり、活動を生み出すことが大切である。さらに、その活動を楽しみながら展開し、充実感や満足感を味わう中で、次第に目当てをもったり、自分の思いが実現するように工夫したりして、そのような課題を自分で乗り越えることが極めて大切である。

表1 「自立心」につながる幼児の経験内容と根拠資料との関連

| | 「自立心」につながる
幼児の経験内容 | 「自立心」 | 「内容(2) 自分で考え、自分で
行動する」の解説の記述 |
|-------------|---|---|--|
| 4
歳
児 | <ul style="list-style-type: none"> ・ やりたいことを自分で見付ける。 ・ 自分から環境に関わる。 | 身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、 | まず、自分がやりたいことをもち、自分から興味や関心をもって環境に関わり、活動を生み出す。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・ イメージの実現のため、自分で考える。 ・ イメージが実現したときの楽しさや満足感を味わう。 | | その活動を楽しみながら展開し、充実感や満足感を味わう。 |
| 5
歳
児 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分でイメージを実現させ、遊びを進める楽しさや満足感を味わう。 ・ イメージの実現のため、自分で考えたり工夫したりする。 | しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、 | 目当てをもったり、自分の思いが実現するように工夫したりして |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・ 思うようにいかないときに、自分で解決しようとする。 ・ 諦めずにやり遂げようとする。 | | そのような課題を自分で乗り越える。 |
| 修
了
時 | 仮説：「自立心」の姿 | 自信をもって行動するようになる。 | 自分なりに考えて自分の力でやってみようとする。 |

このことにより、事例研究から捉えた「自立心」につながる幼児の経験の内容は、妥当であると捉えた。

⁹ 幼稚園教育要領（文部科学省 平成29年3月）p. 4

¹⁰ 幼稚園教育要領（文部科学省 平成29年3月）p. 13 及び幼稚園教育要領中央説明会資料（文部科学省 平成29年7月）p. 53 の記述より

¹¹ 幼稚園教育要領中央説明会資料（文部科学省 平成29年7月）p. 169

(2) 自信をもって行動するようになるために必要な経験

文献研究及び事例研究を基に、幼児が自信をもって行動するようになるために必要な経験を、幼児の実態に即したねらいの設定や意図的・計画的な援助につなげるため、以下の四点に整理した。

- ① 自分でやりたいことを決める経験
- ② 自分から環境に関わり行動する経験
- ③ 自分の力で考えたり工夫したりする経験
- ④ 自分のめあてに向かって諦めずにやり遂げる経験

この「①～④の経験」は一つずつ切り分けられるわけではなく、この流れを幼児一人一人の発達状況に応じた経験として繰り返し行き来しながら積み重ねていくものであることは、事例研究からも明らかである。しかし、幼児の実態に即した発達を見通し、今必要な経験を積み重ねることで、身に付けることができるよう、教師がねらいを設定し、意図的・計画的な援助をすることが必要であると考え、「①～④の経験」を、次の「図1 幼児が自信をもって行動するようになるために必要な四つの経験」(以下、「四つの経験」とする。)に表した。

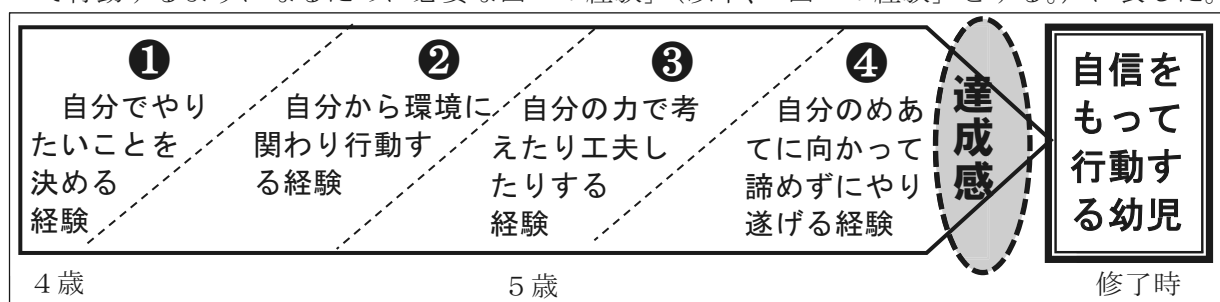


図1 自信をもって行動するようになるために必要な四つの経験

4 自信をもって行動する幼児を育てるための援助

幼児は、「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、信頼する教師に支えられながら、物事を最後まで行う体験を重ね、自分の力でやろうとする気持ちをもったり、やり遂げた満足感を味わったりするようになる」¹²。また、日々の保育、文献研究及び事例研究から、「四つの経験」のそれぞれにおいても、その都度、幼児が満足感や充実感を味わうことで、次の経験につながることを確認した。そのため、教師は幼児が「四つの経験」のそれぞれの経験ができた際にも、確実にその姿を認める援助をすることで、経験が幼児の自信となって積み重なり、自信をもって行動する幼児の姿につながると考える。

そこで、「四つの経験」に基づいて、それぞれの経験を積み重ねることで、自信をもって行動する幼児を育てるための援助を明らかにし、次ページの「表2 幼児が四つの経験を積み重ねるための援助」として整理した。

この表は、日々の保育や事例研究、文献研究から、「四つの経験」のそれぞれにおいて、課題として見られる一般化した幼児の姿を「課題となる幼児の姿」として示し、その姿に対する教師の主な援助をキーワードで示すとともに、その援助の具体例を示した。「課題となる幼児の姿」を幼児一人一人の実態に合わせ、より具体的な幼児の姿として捉え、その姿に応じ

¹² 幼稚園教育要領中央説明会資料（文部科学省 平成29年7月）p. 53

た教師の援助は「いつ」、「何を」、「どこで」、「どのように」などの要素を付加し、具体的な援助につなげるための指標として活用することを意図して作成したものである。

なお、援助は「示す」、「気付かせる」、「引き出す」、「手伝う」、「認める」、「確認する」、「見守る」、「受け止める」、「振り返る」にキーワード化してまとめた。

表2 幼児が四つの経験を積み重ねるための援助

| 四つの経験 | 課題となる幼児の姿 | 教師の援助 |
|-------------------|--------------------------------|--|
| ①自分でやりたいことを決める経験 | ア 身近な環境に気付いていない。 | 気付かせる
・身の回りの環境を見せたり、伝えたりする。
引き出す
・タイミングを見て、幼児の興味に応じた遊びに誘う。
示す
・幼児の興味や関心に応じた環境を構成する。
・友達の遊びが見えるような環境を構成する。 |
| | イ 身近な環境に気付いているが、決めることができない。 | 引き出す
・選択したり、答えたりしやすい質問をする。
・関心や興味を引き出すような言葉を掛ける。
・やりたいことやイメージを明確にする。
示す
・遊びのきっかけになるような素材を提示する。
・複数の素材や用具等を選択しやすい配置にする。 |
| | ウ 環境に気付いているが言動に移せない。 | 見守る
・自ら言動に移すまでの時間を保障する。
示す
・教師がモデルとなって遊ぶ。 |
| ②自分から環境に関わり行動する経験 | ア やりたいことは決まっているが、遊び始めることができない。 | 認める
・やりたいことが決まっていることを改めて認め、遊びへの意欲を高める。
受け止める
・幼児の思いを聞き取り、寄り添う。
引き出す
・必要な動きや物事を明確にするため、幼児に問い掛けたり、一緒に考えたりする。
示す
・イメージに沿った素材や、具体的な遊びの進め方のヒントを提示する。
・扱いやすい用具や、取り組みやすい素材を用意する。
・遊びの展開を予想し、必要な物を準備したり、一緒に遊んだりする。
・場を構成できるようスペースを確保したり、物を提示したりする。 |
| | イ 遊び始めるが、遊び進めることができない。 | 受け止める
・遊びの仲間となり、遊びの楽しさとともに困っていることにも共感する。
気付かせる
・必要な動きや物事、遊びの流れに気付けるよう、問い掛けたり、一緒に遊んだりする。
確認する
・展開に動きが出るよう、役割や状況を確認する。 |
| | ウ 必要な物事があるが、自ら取り入れようとはしない。 | 手伝う
・必要な物を一緒に考えて作ったり、部分的に作ったりする。
受け止める
・新しい物事を取り入れることの不安に共感しながら思いを聞く。
示す
・友達が遊んでいる様子を知らせたり、教師が見本を見せたりする。 |

| | | | |
|--------------------------|---|---------------------|--|
| | エ | 少し難しいことがあると、遊びが止まる。 | 認める <ul style="list-style-type: none"> つまずきを言語化させ、伝えられたことを認める。 ここまでの遊びの様子や頑張りを認める。 手伝う <ul style="list-style-type: none"> 素材や用具の扱い方が分かるように教えたり、一緒にやってみたりする。 気付かせる <ul style="list-style-type: none"> ヒントになる物事を教師がつぶやいたり、言葉を掛けたりする。 示す <ul style="list-style-type: none"> 選択して遊び進めることができるよう、複数の例を示す。 次の動きにつながるよう、複数の素材を準備する。 難しいと感じている物事を分かりやすくする。 |
| ③ 自分の力で考えたり工夫したりする経験 | ア | 遊びに広がらない。 | 引き出す <ul style="list-style-type: none"> 今の遊びの様子や幼児の経験を尋ねる。 気付かせる <ul style="list-style-type: none"> 教師が遊びの仲間になり、他の視点を伝える。 友達の遊びを通して、工夫したり試したりすることに気付かせる。 示す <ul style="list-style-type: none"> 新しい材料や、新しい使い方等を提示する。 遊びに取り入れられそうな新しい視点やヒントを提示する。 |
| | イ | イメージはあるが技能が伴わない。 | 確認する <ul style="list-style-type: none"> イメージを聞き取り、困っている点を明確にする。 手伝う <ul style="list-style-type: none"> 教師と一緒に遊んだり、作り方を教えたりする。 気付かせる <ul style="list-style-type: none"> これまでの経験を思い出させ、生かせるようにする。 |
| | ウ | 少し難しいと友達や教師を頼る。 | 気付かせる <ul style="list-style-type: none"> どうすればいいのかを共に考え、ヒントを与える。 受け止める <ul style="list-style-type: none"> 幼児の思いや葛藤を受け止め、共感する。 確認する <ul style="list-style-type: none"> 幼児の思いを再確認し、イメージを明確にする。 示す <ul style="list-style-type: none"> 見通しをもてるよう、予定表や表示を掲示する。 |
| ④ 自分のめあてに向かって諦めずにやり遂げる経験 | ア | 思いが持続せず、途中でやめる。 | 認める <ul style="list-style-type: none"> 最後までやり遂げられるように励ます。 幼児のこれまでの頑張りを認める。 気付かせる <ul style="list-style-type: none"> 幼児のめあてを再確認したり、見通しを知らせたりする。 示す <ul style="list-style-type: none"> 幼児がやることを視覚的な物で示す。 めあてが実現したときの楽しさを伝える。 |
| | イ | 難しいことに取り組むことを諦める。 | 示す <ul style="list-style-type: none"> やることをスモールステップで手順などを示す。 手伝う <ul style="list-style-type: none"> 教師も一緒に取り組みながら、達成までの道筋を共有する。 認める <ul style="list-style-type: none"> これまでの頑張りを思い出させ、励ます。 他児に幼児の頑張りを伝え、意欲をもたせる。 |
| | ウ | めあてを実現して満足している。 | 認める <ul style="list-style-type: none"> 幼児のめあてが実現したことを認める。 振り返る <ul style="list-style-type: none"> やり遂げたことを一緒に振り返り、達成感を実感させる。 |

5 検証保育（抜粋）

「自立心」に着目して作成した「図1 自信をもって行動するようになるために必要な四つの経験」及び「表2 幼児が四つの経験を積み重ねるための援助」を活用した意図的・計画的な援助を行うことが、自信をもって行動する幼児を育てるために有効かどうかを実践し、検証することにした。

(1) 2年保育4歳児9月中旬

4歳児の検証保育においては、次の援助の効果を検証することとした。

- ① 自分でやりたいことを決めるための援助
- ② 自分から環境に関わり行動するための援助

ア 検証① 自分でやりたいことを決めるための援助

(ア) 指導案

| <p>< C児の実態 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新しい遊びや活動に慎重であり、伸び伸びと参加することができないことがある。 ・ 夏休み明けは、友達や教師が楽しんでいる製作やごっこ遊びに興味をもつが、自分からは参加しない姿が見られる。 <p>< 教師の願い ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分でやりたいことを選んだり、決めたりするようになってほしい。 ・ 安心して伸び伸びと自分のやりたい遊びを楽しんでほしい。 <p>< ねらい ></p> <p>○ 自分でやりたい遊びを選んだり、決めたりして遊ぶことを楽しむ。</p> | |
|---|---|
| 予想されるC児の姿 | 教師の援助 |
| <p>ア 遊び出せる環境を自分で見付けられない。</p> | <p>示す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 過去に経験した遊びの中から自分でやりたいことを見付けたり、決めたりできるように、前日や午前中に遊んでいた遊びの遊具や場を設定し、C児が遊びの場や遊具を見て、選べるようにする。(ごっこ遊びに必要な用具、テーブル、素材等) <p>引き出す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 一緒に遊びの場を見て回り、興味や関心がもてるよう、言葉を掛けたり、遊具に触れたりする。 <p>気付かせる 引き出す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 他の幼児の遊びの環境（たこ焼きのお店ごっこ、バーベキューごっこ、アイスクリームのお店ごっこ、モルモットランド）の存在に気付かせ、興味や関心を引き出す。 |
| <p>イ 学級内の環境に気付いているが、自分のやりたいことを決められない。</p> | <p>引き出す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ C児の姿や表情からタイミングを計り、やりたい遊びがあるかを尋ねる。 ・ 安心して自分の思いが言えるような雰囲気をつくり、温かい言葉掛けをする。 <p>示す 引き出す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師が遊びをいくつか選び、C児に提示する。「たこ焼きのお店もいいね。」など、C児が興味や関心をもてるような言葉掛けをし、その中から自分で決められるようにする。 ・ C児が選択肢の中から「自分で決められた。」という思いをもてるよう配慮する。 |
| <p>ウ 環境に気付いているが行動できない。</p> | <p>見守る 引き出す 示す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ C児の思いを教師が改めて読み取り、やりたい遊びを見付けられるよう、C児が決めやすい手だてを工夫する。 |

| | | |
|---|-----------------------------|--|
| ウ | 様々な遊びがあることは分かるが、自分で決められない。 | 引き出す
・ 教師の提案をきっかけとして遊びを決められるよう、C児が一番興味をもつと予想される遊びに誘う。 |
| イ | 教師が援助をしても、自分でやりたい遊びを決められない。 | 見守る 引き出す 示す
・ 少し時間を置き、周りの遊びや場の状況が変化した頃に、改めて言葉を掛け、遊びが見つけられるように援助する。
・ C児が新たに興味や関心をもった遊びに教師も加わり、遊ぶことができるよう援助する。 |

<評価>

【幼児】 教師との関わりの中でC児が安心して自分でやりたい遊びを選び、遊び始めることができたか。

【教師】 C児の表情や言動から思いを確実に読み取り、安心してやりたいことを決めるための援助ができたか。

(イ) 当日の保育の分析 (抜粋)

| C児の姿及び教師の援助 | 分析 |
|--|--|
| <p>C児は登園後、身支度を済ませると友達の登園や身支度をする姿を見ている。</p> <p>教師が「準備ができたなら遊んでいいよ。」と伝えると、C児は「うん。」とうなずき、再び保育室内を見ている。</p> | <p>周りの友達の遊び出しが落ち着いたのを待ってから、教師が声を掛けたことで、C児は自分でやりたいことを考える時間をもつことができた。 見守る</p> |
| <p>身支度を終えたC児は、たこ焼きのお店ごっこやモルモットランドで遊び始める友達に対して、「今日もたこ焼き作るんだね。」「モルモットがいっぱいいるね。」と声を掛けながら、友達や遊びの場をよく見て回る。教師は、そのようなC児の様子を見守る。</p> <p>学級のほとんどの幼児が遊び始めると、C児は、自身が前日まで遊んでいた焼きうどんのお店ごっこの場に行くが、まだ誰も遊び始めていない。</p> <p>教師は、「何かやりたい遊びはあったかな。」と聞く。C児は首をかしげて、「ううん・・・。」と言った後、焼きうどんのお店ごっこの場にある物を触りながらも、何も答えない。</p> <p>教師は答えを急がず、C児がうどんを触ったり、考えたりしている姿を温かく見守る。</p> <p>しばらくすると、C児は小さな声で「焼きうどん。」と言う。</p> | <p>C児の表情、様子から焼きうどん店をやりたいという気持ちが読み取れた。タイミングを見計らい「何かやりたい遊びはあった？」とたずね、自分で遊びを決めるきっかけを作る援助を行った。答えを急がずに、答えやすい雰囲気を作って見守ったことで、C児は安心して、心の準備をしてから自分のタイミングでやりたいことを決めて言うことができた。 見守る 引き出す</p> |
| <p>教師は答えを急がず、C児がうどんを触ったり、考えたりしている姿を温かく見守る。</p> <p>しばらくすると、C児は小さな声で「焼きうどん。」と言う。</p> <div data-bbox="662 1478 853 1713" data-label="Image"> </div> <p>教師は「いいね。昨日の焼きうどん、美味しかったよね。」とC児の気持ちを受け止めた後、「できたら食べにいくね。」と伝え、少し離れた場所からC児が焼きうどんのお店ごっこの準備をする姿を見守る。</p> | <p>自分で決められたことを教師が受け止め、安心して遊び出せるような言葉掛けをしたことや、教師が後に行くことを伝えたことにより、C児は自分で遊びの場を準備することができた。</p> <p>また、C児は自分で決めたことを教師に言葉で伝えられたことをうれしく感じている様子が見られた。 見守る 引き出す</p> |

(ウ) 考察

- ・ C児が興味をもちそうな環境 (昨日の環境) や遊び始める友達の姿があったことは、自分から周りを見てやりたい遊びを見付けようとしたり遊びを決めたりするきっかけ

となった。

- ・ C児の姿を具体的に予想し、その姿に応じた教師の援助を考えたことで、C児の姿に応じた適切な援助を即座に判断し、実践することができた。また、C児に対しての援助を実践する中で、様々な「自分でやりたいことを決められない姿」を想定したことにより、C児の姿に応じて次に何をねらうかを明確にして援助することができた。
- ・ なかなか遊び出せずにいたC児の様子を見守り、言葉を掛けるタイミングを見計らってから、C児が自分で遊びを決められるような言葉掛けをしたことは効果的な援助であった。教師がC児の心の動きを表情や行動から読み取り、幼児の姿に合わせながら「見守る」、「引き出す」という援助を行い、時間の保障を図ったことで、C児は安心して自分でやりたい遊びを決めることができた。

イ 検証② 自分から環境に関わり行動するための援助

(ア) 指導案

| <p><C児の実態></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 周りの状況や友達の姿が気になって自分のやりたい遊びが楽しめないことがある。 <p><教師の願い></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 安心して自分のやりたい遊びを楽しむ中で、物や場を準備したりなりきって遊んだりすることを楽しんでほしい。 <p><ねらい></p> <p>○ 自分から環境に関わり楽しむ中で、満足感を味わう。</p> | |
|--|--|
| 予想されるC児の姿 | 教師の援助 |
| ① 午前中の遊びの続きの準備をする。 | <p>示す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前日や、午前中の遊びを再現し、自ら遊び始められるように、遊んでいた場や素材を残しておいたり、C児と一緒に整えたりする。 ・ たこ焼きのお店ごっこ、バーベキューごっこ、アイスクリームのお店、モルモットランドが楽しめるように、それぞれが遊ぶ上で十分な量の素材を用意する。 |
| ア やりたい遊びは決まっているが、何かからすればよいか悩む。 | <p>示す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師が気持ちに寄り添いながら、C児と一緒に前日からの遊びの様子を伝える。遊びに使う物や素材に触れたりしながら、幼児の遊び出す気持ちが高まるようにする。 |
| イ 自分の遊びを準備し、遊び出す。 | <p>認める 受け止める 引き出す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ C児なりに場や物を準備している姿を温かく見守る。昨日の楽しかった遊びを思い出せるような言葉掛けをしたり、「楽しそうだね。」と取り組んでいる姿を認めたりして、安心して遊び進められるようにする。 |
| イ 前日や午前中と同じように、友達や必要な材料等を取り入れて楽しもうとする。 | <p>示す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 必要に応じて材料を教師が補充したり、一緒に準備したりして遊び進められるようにする。 <p>認める 受け止める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前回の遊びを再現したり、楽しかったことを思い出したりしながら自ら遊びを進めようとする姿を見守ったり、認めたりする。 ・ 満足感や充実感を十分に味わえるよう、その都度、C児の楽しさを受け止める。 |

| | | |
|---|---|---|
| ウ | 遊びを進めて行く中で、新しいイメージや次の遊びへのイメージが生まれ、遊びを進めようとする。 | <p>受け止める 示す</p> <ul style="list-style-type: none"> 遊びの中で出た新たなイメージや作りたい物など、C児の思いを受け止め、それらを実現できるように教師も一緒に遊ぶ。 新しい素材を使って遊びを進める中で、素材の性質や扱い方を知らせる。 新たなイメージを表現して遊ぶことが十分に楽しめるよう、遊びを実現できる場を保障し、整理したり調整したりする。 <p>受け止める 引き出す 示す</p> <ul style="list-style-type: none"> C児なりの考えを受け止めながら、必要に応じて新たな素材を教師が意図的に提示する。 C児が自分で決めたり、関わったりできるよう、選択できる環境構成を工夫する。 <p>認める</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分なりにイメージを考えて、遊びを進めていく面白さや場や物を出来上がっていく中で満足感を味わえるよう、C児の行動を認め、価値付ける。 |
| ウ | 場や物を準備することを楽しむが、どのように動いてよいか分からなかったり、一緒に遊ぶ友達と関われなかったりする。 | <p>認める 気付かせる</p> <ul style="list-style-type: none"> なりきって遊ぶことを楽しめるよう、教師が遊びの一員として動きながらモデルを示し、なりきる楽しさを感じることができるようにする。また、教師がお客になり、やり取りの楽しさに気付かせる。 <p>認める</p> <ul style="list-style-type: none"> 教師と一緒に動きながらなりきって遊ぶ楽しさに共感したり、C児の動きを認めたりしていく。 なりきって遊ぶことや、物や場に関わって遊ぶ満足感が味わえるよう、にする。 |

<評価>

【幼児】 自分のやりたい遊びを自ら環境に関わりながら進め、なりきって遊ぶことを楽しみ、満足感を味わえたか。

【教師】 イメージを引き出せるような言葉を掛けたり、動きや言葉を受け止めたりし、C児が自分から環境に関わるための援助ができたか。

(イ) 当日の保育の分析 (抜粋)

| C児の姿及び教師の援助 | 分析 |
|---|--|
| <p>C児と友達が焼きうどん店を開いている。そこに他の友達がやって来て、「うどんください。」と言うと、C児は「まだです。」と答える。</p> <p>教師もC児に、「いい匂い。もうちょっとでできますか。」と尋ねる。C児は「はい。もうちょっとです。」と答える。</p> <p>しばらくして、教師が「できましたか。」と聞くと、友達が「お金をください。」と言う。それを聞いたC児も、友達の言葉に合わせて「お金が掛かります。」と言う。教師が「では、お金を作って来ますね。」と伝え、製作コーナーへお金を作りに向かう。</p> <p>教師が再びC児のお店に行き、「お金を持って来たよ。」と言うと、C児は焼きうどんをパックに入れて準備する。しかし蓋を留めるための輪ゴムが見付からず、「輪ゴムが無い。輪ゴム持ってこよう。」と言い、製作コーナーへ取りに行く。</p> | <p>教師が、数回のタイミングに分けて、焼きうどん店のイメージに沿った言葉掛けを行ったことで、C児は安心して焼うどん店の店員になりきって、言葉でやり取りすることを楽しんでいた。</p> <p>また、C児と教師のやり取りが、友達の遊びのイメージをも引き出し、それがまたC児の新しいイメージにつながった。</p> <p>示す 引き出す 受け止める</p> |

C児は「持って来ました。」と言いながら焼きうどん店に戻り、パックに輪ゴムを掛けようとする。しかし、なかなか掛けることができない。何度も繰り返し取り組み、輪ゴムを自分で掛けることができると嬉しそうな表情を見せ、「はい、どうぞ。」と教師に渡す。



教師が友達と「C君には、お肉を大盛りでお願いしたよ。」「先生はニンジンが苦手なんだ。」とやり取りをしていると、それを聞いていたC児は、肉に見立てた茶色い画用紙を用意する。

友達がC児に「先生の嫌いなニンジンを入れてみようよ。」と小さな声で言い、二人は楽しそうに笑う。

C児は肉にするために持っていた茶色い画用紙を「これをニンジンにしてみようよ。」と言い、茶色い画用紙をさらに切る。

友達が教師に「ニンジン大盛りです。」と焼きうどんを渡すと、その様子を見ていたC児は口を押さえて笑いをこらえる。教師は「おいしそうだね。」と言って、食べようとする。

するとC児は「ちょっと待ってください。」と教師に言い、焼きうどんに何かを振りかける仕草をして、「辛いですよ。」と言う。教師が「辛い物は大好きなんだ。」と言うと、C児は「これは大辛ですよ。」と言う。

教師が一口食べて見せ、「これは辛いですね。」と辛そうな表情をすると、C児と友達は顔を見合わせ、「やったね。」と喜ぶ。

店員になりきり、教師に焼きうどんを渡したいという思いが強いため、自分で輪ゴムを取りに行き、少し難しいことでも諦めずに取り組んでいる。できたときには、嬉しそうな表情から、自分でできた満足感を味わっていることが分かる。

受け止める 見守る

友達と教師のやり取りを聞き、C児も焼きうどんに具を入れることを考え、更に遊びを楽しもうとしている。

友達の提案を受け入れ、C児なりに茶色い画用紙をニンジンに見立てることを考え、友達に提案している。また、教師の反応を期待しながら遊びを進めることを楽しむことができた。

引き出す

C児は、自分で教師を驚かせようと考え、実行している。教師は、その姿を受け止め、更に言葉を掛けたことにより、C児も更に呼応することが多くなっている。

教師は、C児が期待しているであろう反応を予想して示すことで、C児の考えや取組を認めた。

その教師の援助が、C児が友達と顔を見合わせて、「やったね。」と喜んでいることから、自身の考えが実現したことへの満足感につながっている。

受け止める 示す 認める

(ウ) 考察

- 教師は、C児が自分で決めたことを環境に関わりながら実行できるよう、言動を受け止める、認めるという援助を多く行っていた。教師の援助により、C児は安心して自分から友達や教師と関わったり、必要な材料を探したりして自分から環境に関わって遊ぶことにつながった。
- 教師がC児のイメージに合わせたやり取りをして、受け止めることで、幼児の満足感や充実感を高めることができる。また、やり取りの中で幼児が新しいアイデアを思い付いたり、さらにやりたいことを見付けたりできるよう、言葉や動き、表情により引き出す援助も行っている。
- C児に対しての直接的な援助ではなく、友達に対して援助を行ったことが、C児への間接的な援助となり、遊びのイメージやアイデアが広がることにつながった。間接的な援助についても意識することが必要である。

- ・ 幼児が自分から環境に関わり、行動しようとする姿を認めることが、より遊びを楽しんだり、やりたいことが実現させたりする気持ちにつながる。そして、そのことが遊びへの満足感や充実感を生み、「自分の力で考えたり工夫したりする経験」へつながっている。

(2) 2年保育5歳児10月初旬

5歳児の検証保育においては、次の援助の効果を検証することとした。

③ 自分の力で考えたり工夫したりするための援助

④ 自分のめあてに向かって諦めずにやり遂げるための援助

ア 検証③ 自分の力で考えたり工夫したりするための援助

(ア) 指導案

| <p><D児の実態></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分がやりたい遊びに意欲的に取り組み、その遊びに使いたい物を自分なりにイメージしたり、遊び方を考えたりする。発想が豊かで、遊びのめあてが明確である一方、イメージを実現する方法を思い付かない時には、自分なりに考えたり工夫したりする前に教師や友達に頼ることがある。 <p><教師の願い></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どのようにしたら自分のイメージを実現できるかを、自分なりに考えたり工夫したりしながら遊ぶことを楽しんでほしい。 <p><ねらい></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自分のイメージを実現する方法を考えたり、繰り返し工夫して試したりして遊ぶことを楽しむ。 | |
|---|--|
| 予想されるD児の姿 | 教師の援助 |
| <p>②
—
ア</p> <p>海賊ごっこの場を作るが、遊び始めずにその場にいる。</p> | <p>認める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 海賊の道具、船などD児なりに考えて作った物や場を具体的に認め、意欲や自信につなげる。 <p>引き出す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 海賊に対するD児の思いやイメージを尋ねる。 |
| <p>②
—
イ</p> <p>海賊ごっこのための場ができるが、どのように遊びを進めていけばいいかが分からない。</p> | <p>受け止める 確認する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ D児が作った船や海賊の道具について、教師が丁寧に思いを聞くことで、D児なりのイメージを認めたり、確認したりする。 <p>気付かせる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師が海賊の仲間として加わり、遊びを進めるきっかけとなるよう、モデルとなる動きをする。 <p>確認する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ D児のイメージをより明確にしながら、次にすることや遊び方を一緒に考えたり、ヒントを伝えたりする。 |
| <p>②
—
エ</p> <p>必要な物を作ろうとするが、素材の使い方が分からない。</p> | <p>認める 示す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ D児なりに海賊ごっこに必要な用具を考えたり工夫したりして作ろうとしたことを認め、素材の新しい使い方や作り方などを提案したり、D児が自分で気付けるような場所に置いたりする。 |
| <p>イ</p> <p>海賊ごっこのために作りたいもののイメージがあるが、素材をどのように使うのか思い付かない。</p> | <p>示す 手伝う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 援助を要する部分と自分で取り組める部分を見極め、D児の実態に合わせた段階の製作方法を提示したり、一部だけ手伝ったりして、「自分でできた」という思いが味わえるようにする。 <p>確認する 手伝う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これまで使ったことがある素材を振り返り、経験を生かせるようにするとともに、一緒に遊びながら使い方を教える。 |

| | | |
|---|---|---|
| ウ | 海賊ごっこの道具や船など、自分のイメージに合うものができず、困っている。 | <p>受け止める</p> <ul style="list-style-type: none"> D児の思いや葛藤に共感したり、意欲を持続させられるよう、励ましたりする。 <p>気付かせる</p> <ul style="list-style-type: none"> 言葉を掛けたり、環境構成に配慮したりし、友達の姿に気付かせることで、友達が使っている素材や用具の使い方、物の作り方に気付けるようにする。 |
| ウ | 海賊ごっこで作りたい物が思うように作れず、友達にやってもらったり、遊びを止めたりする。 | <p>受け止める</p> <ul style="list-style-type: none"> 試行錯誤が必要な場面では、D児の葛藤を受け止めて励ましたりする。 <p>気付かせる 示す</p> <ul style="list-style-type: none"> 考えたり工夫したりするポイントを明確にし、「やったらできそうだ」と感じられるくらいの難易度になるように配慮する。 |
| ウ | 海賊ごっこで思うようにいかないことがあると、教師にやってもらおうとする。 | <p>受け止める</p> <ul style="list-style-type: none"> 頼りたくなる気持ちを受け止め、励ましながらD児の力で取り組めるようにし、「自分でできた」という思いを感じられるように言葉を掛ける。 <p>示す</p> <ul style="list-style-type: none"> 「自分でできた」と感じられるように、D児のつまづいている部分を読み取り、自分で取り組むためのポイントを提示する。 |
| ウ | これまでの遊びから、発展させようとしたり、新しいイメージをもって取り組んだりする。 | <p>示す</p> <ul style="list-style-type: none"> 遊びを進める中で、じっくりと取り組める場や時間を保障する。 一日の中で、遊べる時間や場などを知らせ、見通しをもって取り組めるようにする。 <p>受け止める 示す</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分たちが頑張ったことや楽しかったことを受け止める時間を作り、次にやることを整理したり明日への遊びに期待をもてるようにする。 |

<評価>

【幼児】 自分のめあてに向かって、いろいろな素材を使って遊び方を考えたり、工夫したりして遊ぶことを楽しんでいたか。

【教師】 幼児の気持ちに寄り添ったり、教師も共に考えたりして、幼児が自分の力で考えたり工夫したりすることができるような援助ができたか。

(イ) 当日の保育の分析(抜粋)

| D児の姿及び教師の援助 | 分析 |
|--|---|
| <p>D児は、自分で作った段ボールの海賊船をテラスに持って行く。船の中で腰ベルトを着け、海賊船の横に寝転ぶ。</p> <p>しばらくすると思い立ったように起き上がり、教師のところに行き、「ちょっと足りないところがある。これだけじゃさみしい。」と訴える。</p> <p>教師が「何かつけるのはどうかな。」と言うと、D児は「いいことを思い付いた。」と大きなブロックのタイヤを指す。教師が「タイヤを付けるの。」と尋ねると、D児は「うん。タイヤが5個必要。」と言う。</p> <p>D児はタイヤを地面に並べる。教師が「くっつけるの。」と聞くと、D児は「そうだね。」と言いながら、しばらく考え、海賊船をひっくり返し、タイヤを付ける準備をする。</p> | <p>D児は「もっと船をよくしたい。」という意欲をもっているが、具体的な案を思い付いていない。このため、教師が工夫の案を示したことで、D児が次のめあてをもつことにつながった。</p> <p>示す 気付かせる</p> <p>教師はD児が取り組もうとしていることを言葉にして確認し、やることへの意識を高めた。</p> <p>示す 確認する</p> |

D児は海賊船の底面にタイヤを並べて、ガムテープで一度に全て貼ろうとするが、うまく付かない。D児は「難しい。」と言う。

教師は、タイヤを段ボールに貼っている他の場にいる幼児の姿を示し、「あそこにいる友達はどのようにやっているのかな。」と言葉を掛ける。

D児は、友達の様子を見に行くと「タイヤがちゃんとかっついてたよ。テープをくるっと巻いていたよ。」と教師に言う。

D児がガムテープを切ろうとするが、うまく切れない。通りがかった友達がそれに気づき、手伝う。

D児が「あと9個もテープがいる。」と言うと、友達が「私が半分くらいやったら、Dちゃんもできるかもよ。」と励まし、ガムテープを切って丸めた物をD児がタイヤに貼る。

教師は「友達のおかげでうまくいきそうだね。」と言う。すると、切ってもらったガムテープをD児が自分で丸めるようになる。

もう少しでタイヤが全部付くという頃に、教師が「もう少しでできるね。」と言うと、D児は友達に「ありがとう。最後の一つだ。」と言う。

D児はタイヤを持ち上げ、最後のタイヤを段ボールに付ける。

教師が「ここまでできたね。」と言うと、D児は「でも、うまくいかなかった。(海賊船の)おしりが落ちちゃうの。タイヤがあと二つは必要だな。」と言う。教師は「そうなのね。でもここまではできたね。また明日やろうか。」と言う。

D児は道具や剣を船内に入れると、動かして保育室の「港」である場所に船を片付ける。D児は自分で船を動かし、動いている様子を嬉しそうに見ながら片付ける。船を置くと床に寝転び、にっこり笑う。

D児は思うようにいかないことがあり、どうすればいいか分からずにいた。そこで、教師は友達のしている方法に気付けるように、つぶやいたり、声を掛けたりして、D児がめあてを実現する方法に気付くことができるようにした。

示す 気付かせる



教師はD児の「なかなかできない。」という思いに共感するとともに、友達と協力していることを認めるため、「もう少しでできるね。」と言った。この言葉が、D児にとっての見通しとなり、新たな動きにつながったのではないか。また、タイヤを付けるという思いの持続にもつながっている。

受け止める 認める 示す

教師はD児の頑張った点を認めながら、明日のめあてを再確認し、実現までの見通しをもたせることで、明日への意欲をもてるようにした。

認める 確認する 気付かせる

(ウ) 考察

- 教師はD児のイメージを読み取り、思いや、しようとしている姿を認める、確認するなどの援助を行い、D児自身がすることを意識したり、思いを継続させたりできるように援助している。
- その上で、友達の姿に気付かせたり、一人で行うには難しい作業の時にはD児の気持ちを受け止めたりして、D児が考えたり工夫したりしながら、当初のめあてを実現できるように援助を行った。この援助により、ガムテープを付ける方法や切り方などを自分なりに考えたり友達の助けを借りたりして、めあてに近づくように行動するD児の姿につながった。

イ 検証④ 自分のめあてに向かって諦めずにやり遂げるための援助

(7) 指導案

| <p>< E児の実態 ></p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の遊びには「こうしたい」というめあてを明確にもち、その実現に向け、必要な物や方法を考え、行動する。教師に対しては自分の思いを言葉で明確に伝え、めあてを実現しようとするが、思いが持続せず、当初もっていためあてに到達する前に遊びが終わってしまうことがある。 <p>< 教師の願い ></p> <ul style="list-style-type: none"> 自分が考えたり思い付いたりしたことが実現していく面白さを感じながら、自分のめあてに向かって最後まで諦めずに取り組み、自分の力でやり遂げた達成感を味わってほしい。 <p>< ねらい ></p> <p>○ 自分のめあてに向かって自分が考えたり、思い付いたりしたことをいろいろな方法で実現しながら、自分の力でやり遂げた達成感を味わう。</p> | | | | | | | | | |
|---|---|-----------|-------|--|---|---|--|--|--|
| | <table border="1"> <thead> <tr> <th>予想されるE児の姿</th> <th>教師の援助</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> <p>「虫の街」の完成というめあてをもち、自分なりに考えたり工夫したりするが、思いが持続せず、実現の前にやめる。</p> </td> <td> <p>認める</p> <ul style="list-style-type: none"> これまで取り組んできたことを認め、思いの持続につなげる。 <p>示す 気付かせる</p> <ul style="list-style-type: none"> 「虫の街」の完成イメージ図を改めて見たり、当初の思いを再度確認したりして、やりたいと思っていたことに気付かせる。 </td> </tr> <tr> <td> <p>「虫の街を完成させよう」というめあてをもち、めあてに近付けるために自分なりに試したり工夫したりする。</p> </td> <td> <p>示す</p> <ul style="list-style-type: none"> 「虫の街」の完成図を見ながら、具体的に行うこと視覚的に示して、見通しを知らせ、最後までやり遂げられるように支えていく。 完成した時への期待を伝える。 </td> </tr> <tr> <td> <p>「虫の街」を作り、自分（自分たち）のイメージどおりの物を作って遊べたという充実感をもっている。</p> </td> <td> <p>認める</p> <ul style="list-style-type: none"> 「虫の街」の完成というめあてに向かって自分たちで取り組む過程の中で、成功への期待に共感したり、課題を乗り越えようとする姿を認めたり、その面白さに共感したりする。 周囲の幼児に努力や頑張りが認められることで、より自信につながるように周囲の幼児の言葉を取り上げ、伝える。 <p>振り返る</p> <ul style="list-style-type: none"> 降園時の集まりなどで、頑張った幼児の姿を紹介し、学級全体で振り返る機会を作ることで、達成感や自信をもてるようにする。 </td> </tr> </tbody> </table> | 予想されるE児の姿 | 教師の援助 | <p>「虫の街」の完成というめあてをもち、自分なりに考えたり工夫したりするが、思いが持続せず、実現の前にやめる。</p> | <p>認める</p> <ul style="list-style-type: none"> これまで取り組んできたことを認め、思いの持続につなげる。 <p>示す 気付かせる</p> <ul style="list-style-type: none"> 「虫の街」の完成イメージ図を改めて見たり、当初の思いを再度確認したりして、やりたいと思っていたことに気付かせる。 | <p>「虫の街を完成させよう」というめあてをもち、めあてに近付けるために自分なりに試したり工夫したりする。</p> | <p>示す</p> <ul style="list-style-type: none"> 「虫の街」の完成図を見ながら、具体的に行うこと視覚的に示して、見通しを知らせ、最後までやり遂げられるように支えていく。 完成した時への期待を伝える。 | <p>「虫の街」を作り、自分（自分たち）のイメージどおりの物を作って遊べたという充実感をもっている。</p> | <p>認める</p> <ul style="list-style-type: none"> 「虫の街」の完成というめあてに向かって自分たちで取り組む過程の中で、成功への期待に共感したり、課題を乗り越えようとする姿を認めたり、その面白さに共感したりする。 周囲の幼児に努力や頑張りが認められることで、より自信につながるように周囲の幼児の言葉を取り上げ、伝える。 <p>振り返る</p> <ul style="list-style-type: none"> 降園時の集まりなどで、頑張った幼児の姿を紹介し、学級全体で振り返る機会を作ることで、達成感や自信をもてるようにする。 |
| 予想されるE児の姿 | 教師の援助 | | | | | | | | |
| <p>「虫の街」の完成というめあてをもち、自分なりに考えたり工夫したりするが、思いが持続せず、実現の前にやめる。</p> | <p>認める</p> <ul style="list-style-type: none"> これまで取り組んできたことを認め、思いの持続につなげる。 <p>示す 気付かせる</p> <ul style="list-style-type: none"> 「虫の街」の完成イメージ図を改めて見たり、当初の思いを再度確認したりして、やりたいと思っていたことに気付かせる。 | | | | | | | | |
| <p>「虫の街を完成させよう」というめあてをもち、めあてに近付けるために自分なりに試したり工夫したりする。</p> | <p>示す</p> <ul style="list-style-type: none"> 「虫の街」の完成図を見ながら、具体的に行うこと視覚的に示して、見通しを知らせ、最後までやり遂げられるように支えていく。 完成した時への期待を伝える。 | | | | | | | | |
| <p>「虫の街」を作り、自分（自分たち）のイメージどおりの物を作って遊べたという充実感をもっている。</p> | <p>認める</p> <ul style="list-style-type: none"> 「虫の街」の完成というめあてに向かって自分たちで取り組む過程の中で、成功への期待に共感したり、課題を乗り越えようとする姿を認めたり、その面白さに共感したりする。 周囲の幼児に努力や頑張りが認められることで、より自信につながるように周囲の幼児の言葉を取り上げ、伝える。 <p>振り返る</p> <ul style="list-style-type: none"> 降園時の集まりなどで、頑張った幼児の姿を紹介し、学級全体で振り返る機会を作ることで、達成感や自信をもてるようにする。 | | | | | | | | |
| <p>< 評価 ></p> <p>【幼児】 自分のめあてに向かって、諦めずに自分の力で最後まで取り組み、やり遂げる達成感を味わえたか。</p> <p>【教師】 幼児の頑張りを認めたり、次に必要なことに気付かせたりし、幼児が自分のめあてに向かって、諦めずに最後まで取り組むことができるような援助をすることができたか。また、やり遂げる達成感を味わえるような言葉掛けができたか。</p> | | | | | | | | | |

(イ) 当日の保育の分析(抜粋)

| E児の姿及び教師の援助 | 分析 |
|---|--|
| <p>E児は以前から段ボールで作っている「虫の街」をテラスに運ぶ。</p> <p>次に、E児が別の段ボールを持ってきたため、教師が「どうするの。」と尋ねると、E児は「虫の街」と段ボールを指しながら、「これをつなげる。」と言う。</p> <p>E児は何か思い付いた様子で製作コーナーに行くと、黄緑のビニールテープを持って来て、「虫の街」と段ボールとをビニールテープでつなげる。</p> | <p>教師は、E児が考えていることを言葉にさせることで、思いを再確認し、めあてを明確にした。このことにより、E児は自分のめあてを実現させるために必要な材料や方法を自分で考え、行動した。</p> <p style="text-align: right;">確認する</p> |

E児が段ボールをつなげたのを見て、教師が「つながったんだね。世界が広がったね。」と言うと、E児は「この柵を壊して、つなげる。」と、箱の間に通路を作りたいことを教師に伝える。

教師が「つなげたいんだね。どうするの。」と再度尋ねると、E児は「ここを全部つなげたい。」と言う。教師は「どうするとつなげられるかな。」と言い、そばに来た友達に「Eくん、悩んでいるみたいだよ。」と言う。

E児は、初めに付けた部分の反対側に、大きめの段ボールを合わせ、「こういう風にしたい。」と教師に見せ、段ボールの端に高さが合うように折り線をつける。

教師が「一人は大変そうだね。」とつぶやくと、E児は「高さが違うから、はみ出すんだよね。」と、両端の高さに差が出ることを気にして、折り直す。

次にE児は「こっちに小屋を作る。」と教師に言う。教師は「どこまで作るの。」と、E児と一緒に「虫の街の完成図」を見る。

E児は「あーどうしよう。」と言って、製作コーナーに行き、緑の画用紙を持ってきて、「虫の街」に合わせてみる。

E児は教師の近くに行き、「小屋を作ろうと思って考えているの。」と言い、教師が「そうなんだね。」と受け止める。

すると、E児は「寝ている場所にしよう。」と、虫を並べ、「人間とか来たらいいな。」とイメージを教師に伝える。

E児は友達に「小屋を作ったんだよ。」と見せると、友達は「おー、すごいね。」と言う。E児は「(「虫の街」が) 大きすぎるんだ。テーブル3個分。」と答える。

友達に手伝ってもらい、二人で保育室に「虫の街」を運んでいると、「虫の街」の中にいたたくさんの虫が途中で落ちてしまう。それを見て、友達と「わあ。」と声をあげる。

E児は「テーブル3個分だから。あの街が大きくなったんだよ。」と言い、教師は「虫の街の完成図」を示しながら「ここまでできたね。」と言う。

E児は作ってあった虫を自分の作った小屋へ戻し、「(虫の) 長い行列ができた。」と数え、教師に行列ができたことを伝えに行く。教師に「たくさんできてよかったね。」と言われると、満足そうにうなずき片付けに行く。

教師は、E児がめあてを実現したことを認め、その上で新たなめあてとその実現の方法を考えられるように、質問をし、E児が考えられるように促しながら、一緒に考えた。

確認する 気付かせる



E児が教師に助けを求めたため、教師はE児の思いや葛藤を受け止めるとともに、解決へ向けて改めて考えるきっかけとなるような言葉掛けをした。

受け止める 示す

教師は、E児と以前作成した「虫の街の完成図」を再び確認することで、次のめあてを確認した。

確認する



新たなめあてをもったE児の思いを教師が受け止めたことで、更にイメージが広がった。

受け止める

「虫の街」が大きくなったことへの満足感を味わっている。E児の満足感をさらに高めるために、完成図を使ってこれまでの取り組みを振り返り、明日へ期待をもてるように援助した。

示す 確認する

たくさん虫ができたことに満足を感じているE児に認める言葉の掛け、今日の頑張りを振り返った。

振り返る

(ウ) 考察

- ・ 教師は、E児のめあてを「確認する」、葛藤を「受け止める」、自分で考えたり工夫したりできることに「気付かせる」、これまでの取組を「認める」などの援助を、幼児の言動に合わせてその都度行った。この援助により、教師とやり取りをしながら、E児は自分でめあてを作り出し、その実現に向かって必要な物を準備し、試行錯誤しながら行動し、実現させることを繰り返す姿につながった。
- ・ 思うようにいかないことがあった時には、教師に自分の状況を話し、受け止めてもらったり認めてもらったりすることで、改めて自分のめあてを明確にし、自分の力で試しながら乗り越えることができた。教師が直接的な援助ではなく、気持ちを支える間接的な援助をすることも有効である。
- ・ 遊び始めの時期に遊びの見通しが視覚的に明確になる（「示す」）よう、「虫の街の完成図」を作成したことで、完成図を目安とした実現がこの遊びのめあてとなった。また、それに向かって一つ一つ作り進めることもめあての一つになっている。「虫の街の完成図」に示した内容を完成させた際には、幼児はやり遂げた達成感を味わうことができるのではないかと考える。
- ・ 遊びの後に、幼児と共に、満足感を味わえた点や頑張っ乗り越えた点を「振り返り」ながら、幼児の思いを言語化し、共感したり、「認めたり」した。このことで、幼児は嬉しそうに今日の遊びについて話したり、次の遊びの見通しを立てたりしていた。このような遊びの振り返りが、幼児の遊びへの満足感を強めたり、次のめあてを明確にしたりして、達成感を味わうことにつながる重要な援助であると考えられる。

6 検証結果

「図1 自信をもって行動するようになるために必要な四つの経験」において、今どのような経験が必要なのか、幼児の実態やねらいを見極め、「表2 幼児が四つの経験を積み重ねるための援助」を活用して、幼児の具体的な姿を予想し、その姿に応じた意図的・計画的な援助を具体的に考え、実践した。その結果、幼児の実態が「四つの経験」のどの段階に位置しているのかを判断し、その前後の経験も意識して援助をすることで、それぞれの経験を確実に積み重ねることにつながるということが分かった。また、援助をキーワード化することにより、明確になり、意図的・計画的な援助を意識して行うことができた。さらに、行った援助についてキーワードを基に評価することにより、どの援助がねらいに対して有効だったかを分析する際にも活用できた。

なお、今回の検証保育において、幼児が満足感を味わう姿は多く捉えられたが、5歳児後半の姿である「達成感を味わう姿」は見られなかった。そのため、達成感を味わう姿については引き続き検証していく必要がある。

VI 研究のまとめ

1 自信をもって行動するようになるために必要な経験の過程の明確化について

○ 幼児が自信をもって行動するようになるまでの過程

「自立心」に着目し、幼児が自信をもって行動するようになるために必要な経験を「四

つの経験」としてその過程を明確化した。

幼児は、自分で「こういう遊びをしたい。」とやりたいことを決めることができると、そのために必要な環境に自分から関わって行動することができ、その楽しさや満足感を味わう経験を積み重ねていく。その中で、次第に、「やりたいこと」は「めあて」としてより明確なものとなり、自分で考えたり、工夫したりしながら少し時間や手間をかけて実現することで、満足感や充実感は更に強くなる。そして、より明確な遊びのめあてや見通しをもち、その実現に向かって諦めずにやり遂げることで、達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

○ 「図1 自信をもって行動するようになるために必要な四つの経験」の作成

幼児に必要な経験を四つにまとめ、発達に応じた経験の積み重ねの順序性を図式化した。このことは、教師が、幼児に必要な経験の積み重ねを意識して幼児の実態やねらいを捉え、幼児が経験を積み重ねるために必要な援助を考える際の指標として活用できる。

2 自信をもって行動する幼児を育てるための援助の在り方について

○ 「四つの経験」とそれに応じた段階的な援助

「四つの経験」を段階的に積み重ねるための教師の援助を明らかにし、「表2 幼児が四つの経験を積み重ねるための援助」を作成した。その際、幼児の姿の具体を「課題となる幼児の姿」として示し、さらにその姿に対する具体的な援助を示すことにより、幼児の姿から必要な援助を考えるという流れを視覚的に表すことができた。

検証保育では、「表2 幼児が四つの経験を積み重ねるための援助」の活用が幼児の実態の丁寧な読み取りにつながり、幼児一人一人へのねらいを明確にした意図的・計画的な援助を実践することができた。その結果、検証保育において、目指す幼児像につながる幼児の姿を多く捉えることができた。このことから、本研究で明らかにした教師の援助は自信をもって行動する幼児を育てる上で、有効であったと考えられる。

○ 「四つの経験」における援助のポイント

「四つの経験」を確実に積み重ねるためには、どの経験においても、その経験をしている幼児の姿を確実に把握し、その都度認めることが重要である。認めることで満足感や充実感を味わい、次の経験の基盤としてつながっていくことを教師は意識しなくてはならない。

① 自分でやりたいことを決める経験への援助

幼児が自分でやりたいことを決める経験を積み重ねるためには、幼児が安心して自分でやりたいことを決められるように、幼児の興味や関心を把握するとともに、表情や言動から幼児の思いを丁寧に読み取り、受け止め、幼児の状況に合わせて見守ったり、思いを引き出ししたりする援助が有効である。そして、「自分で決められた。」と幼児が実感し、行動につなげる援助をすることが必要である。

② 自分から環境に関わり行動する経験への援助

幼児が自分から環境に関わって行動し、楽しさや満足感を味わうためには、まず「やりたいこと」が明確になっている必要がある。そして、幼児のやりたいことに対して必要な物事を、動きや言葉、アイデアなどを受け止めることで引き出し、幼児が関わった

くなる環境を構成する。幼児の周りにいる友達への援助が、環境に関わり行動する経験への間接的な援助になることも意識する。

③ 自分の力で考えたり工夫したりする経験への援助

自分で遊びを進めるために考えたり工夫したりすることの楽しさを十分に味わい、自分の力で実現できた実感をもてるようにするためには、やりたいこと、めあてが明確になっていることが大切である。そして、幼児自身が考えたり工夫したりするための視点を提示することが必要であり、幼児の実態に応じた少し難しいことを示すことで、考えたり工夫したりする機会をもてるようにすることも有効である。そして、自分で考えたり工夫したりして遊ぶ楽しさを感じられるように援助する。

④ 自分のめあてに向かって諦めずにやり遂げる経験への援助

幼児が自分のめあてに向かって諦めずにやり遂げる経験ができるようにするためには、実態に合ったやり遂げるべき対象が必要であり、その対象の設定を見極めて、スモールステップを設定したり、幼児の葛藤を受け止めながら、頑張りを認め、見通しをもたせて次に必要なことに気付かせたりする援助が有効である。また諦めずにやり遂げ、達成感を味わえるようにするためには、明確なめあての設定や十分な時間の保障が必要であり、取組の振り返りが有効である。

○ 自信をもって行動する幼児を育てるための援助の基盤

「四つの経験」を支える基盤として、安心して自分の思いを表現できる学級の雰囲気や教師との信頼関係が大切であることが分かった。4歳児においては、嬉しさや楽しさだけでなく、不安や戸惑いの気持ちも含めてありのままの幼児の姿を受け止め、寄り添う教師の姿勢が幼児に安心感を生み、自分でやりたいことを決めたり、自分なりに行動したりする意欲を支えている。また5歳児においては、工夫したり、やり遂げたりする援助の前に、まず、自分の思いや考えを受け止めてくれる教師や友達の言葉、存在が安心感へつながり、めあてを実現する意欲につながっていく。このように、幼児を受け止め認めていく教師の姿勢が、自信をもって行動する幼児を育てるための援助の基盤となると考える。

また、日常的に見られる「ごっこ遊び」においても、「自立心」を意識すると、「自立心」につながる援助の機会は多くあり、日頃からの教師の意識も援助の基盤となる。

VII 今後の課題

- ・ 本研究は4歳児、5歳児について行ったため、その前段階である3歳児の発達過程と教師の援助についても、今後検討していく必要がある。
- ・ 「表2 幼児が四つの経験を積み重ねるための援助」は、今後も実践と検討を重ねる中で、精度を高め、より活用しやすいものになるよう、改善を図る。
- ・ 5歳児後半の達成感を味わう姿の捉えと教師の援助の検証については、今後の保育において、修了までの幼児が「自信をもって行動する」姿に向かっていけるよう、実践を継続する。

平成 29 年度 教育研究員名簿

幼稚園

| 園 名 | 職 名 | 氏 名 |
|---------------------|------|-----------|
| 港 区 立 青 南 幼 稚 園 | 教 諭 | ◎ 山 下 陽 子 |
| 文 京 区 立 本 駒 込 幼 稚 園 | 教 諭 | 澤 田 亮 |
| 江 東 区 立 ち どり 幼 稚 園 | 教 諭 | 吉 田 元 |
| 品 川 区 立 二 葉 幼 稚 園 | 主任教諭 | 小笠原 絵 美 |
| 葛 飾 区 立 水 元 幼 稚 園 | 主任教諭 | 山 中 敦 子 |

◎世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部義務教育指導課
指導主事 久家 さや加

平成 29 年度

教育研究員研究報告書

幼稚園

東京都教育委員会印刷物登録

平成 29 年度第 142 号

平成 30 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 康印刷株式会社